

令和7年度 部局長と学生との懇談会
【学部・大学院合同開催】

「学生参画会議」テーマ

「A I と共に生きる時代の大学での学びについて」

実施日時：令和7年7月9日（水） 10：00～11：30

場所：大会議室（対面実施）

参加学生数：学部生3名（2年生1名、3年生2名／1年生2名は書面参加）
大学院生7名

司 会：前原学部教務委員長

参加教職員：増島学部長・研究科長

池崎評議員

中山大学院教務委員長

石丸学生生活支援委員長

五十嵐学部教務副委員長

横田教授

事務6名

〔部局の意見〕 提出様式

以下テーマについて〔学生の意見〕及び学生との意見交換をもとに、評価、提案等を行ってください。

テーマ：

「AI と共に生きる時代の大学での学びについて」

触れていただきたい観点：

- 学生と教員の認識について目立ったギャップはどのようなことか。
- 専門分野における学びにどのような影響が起ころうか。
- 「AI 時代におけるよりよい学びの実現」や「AI と共に生きる時代において、大学で学ぶ意義」に関して出た意見。
- AI 時代におけるよりよい学びを実現するための仕組みや方策としてどのようなことが考えられるか（懇談会内で仕組みや方策についての提案がなされた場合に、記載してください）。
- 懇談会の議論を踏まえて、大学教育のあり方について、部局としてどう考えるか。

【部局の意見】

- 学生と教員の認識について目立ったギャップはどのようなことか。

《学生の意見》

学生たちは、AI を情報収集や添削、論文の要約といった文章の見直し、レポート作成のサポート、学習内容の理解を深めるためなど、さまざまな場面で活用している。ただし、利用頻度は人それぞれで、毎日のように使っている学生もいれば、週に 1 回程度の利用にとどまる学生もいる。中には、意識的には使っていないくても、検索結果の要約やおすすめコンテンツなど、自然に AI を活用している場面もあった。

AI の便利な点としては、情報を効率よくまとめてくれることや、わかりにくい内容を整理して説明してくれること、英語学習の補助やレポートの表現の向上に役立つことなどが挙げられていた。一方で、出力される情報の正確性や信頼性については不安を感じており、最終的には教科書や信頼できる資料と照らし合わせて確認しているという声も多く挙げられた。

少し独特な AI の使い方として、時々 AI を相手に悩みを相談したり、なんでもない雑談をしたりするケースが紹介された。AI はどんな場合でも使用者の味方をしてくれ、前向きな言葉をかけてくれる。少し人に言いづらいような些細な悩みを AI に相談してみることで、心の荷を少し軽くすることができる。このように便利な点がある一方で、AI を使うことで私たちは自分の頭を使って考える機会を減らしているというデメリットがある。

また、「AI に頼りすぎると自分で考える力が弱くなるのでは」という懸念や、「今後どのように AI と付き合っていくかを考える必要がある」「AI の出力は正確であるかの確証がなくバイアスが含まれている可能性があることや引用元のインターネットの情報が正しくないことがあるために、使う側の能力に大きく依存する」といった意見も見られた。看護学部で実施される手書きレポートなどの現代にそぐわない慣習の見直しや、AI を使ったより実践的な教育の可能性についての提案もあった。

全体として、学生たちはAIの活用に前向きではあるが、正しく使うためには情報の見極めや使い方の工夫が必要だと感じている様子うかがえた。

《教員の意見》

学生のAI活用状況を聞く中で、多くの教員が、学生が新しい技術を柔軟に取り入れていることに前向きな印象を抱いている意見が述べられた。一方で、AIの活用には迷いや不安も見られ、大学としては、AIでは補いきれない「人間ならではの学び」や「対話的なフィードバック」の価値を伝えていく必要があると感じているという点が挙げられた。

また、AIの正しい使い方について、授業の中で系統的に教える機会の必要性を多くの教員が認識しており、看護職におけるAI活用については学生と共に模索していきたいという意見が見られた。

教員自身もAIの活用法に課題を感じており、学生の意見から学ぶ部分があるとしつつ、自身の授業の中でどのようにAIを取り入れていけるかを模索する姿勢がうかがえた。また、AI活用には情報の真偽を見極める力や、自らの経験をもとに「疑って考える」姿勢が重要であり、それを学生に伝える教育的意義も再確認されていた。

全体として、目立ったギャップがあるわけではなく、AIを教育に取り入れる意欲と同時に、慎重かつ計画的な導入と、看護という専門性を踏まえた活用のあり方を模索する必要性が共通の認識であった。

- 専門分野における学びにどのような影響が起ころうか。

AIの導入によって、専門分野の学びにはさまざまな影響が生じると考える。まず、AIの活用によって資料集めや情報整理が迅速に進むという点では、学習の効率化に大きなメリットがある。理解の難しい病態や生理についても、系統的に解説してくれるので、その中のキーワードからさらに広げて考えるなど、自己学習を支える有効なツールとなっている。ほかにも看護学では膨大な知識やエビデンスに基づいた実践が求められるが、AIを活用することで文献検索や最新の研究動向を短時間で把握できるようになった点や、膨大なインターネットの情報の中から必要な情報をピックアップできるため、人間の調べ学習よりも正確で効率的であるため、看護学生の学習の効率にも寄与している。

一方で、AIの情報には不確かさがあり、信憑性の確認を怠ると誤った知識が広まりかねないという懸念もある。特に医療の現場においては、正しい知識を身につけた医療関係者が伝えたことに耳を傾けない患者が増えるかもしれない。また、AIに頼りすぎることで、自分の思考力や判断力、分析力が育たないという問題も挙げられた。

看護という対象者を意識する分野においては、AIが提供する表現や言い回しは参考になる部分が多いと感じているが、AIの回答が専門性そのものに直接影響するわけではないと考える。AIはあくまで情報へのアクセスを助ける存在であり、それをどう使いこなすかが問われている。

看護学部生としては、課題に対して安易な道を選ばず、自分の力で乗り越えようとする意欲や、専門職としての誇りを持つ姿勢が大切であると考え。そして、AIと共に生きる時代においては、AIをただ使うのではなく、知識の保管庫として活用し、そこから自ら実用的な提案を導き出す力を身につけることこそが、これからの大学教育に求められる学びの在り方であると感じている。

日々進化するAIとともに生きる上で、批判的な思考力や情報の取捨選択力そして研究の「問い」を立てる力がますます必要になると考える。AIの出力が正しい事実であるのかを常に批判的に思考することや自分の必要としている情報が出力されるようにプロンプトを設定する力も必要不可欠であると考え

る。大学や教員の方々や社会に期待することとしてはこのような思考スキルや AI リテラシーを育む教育をもっと増やすことで学生の学習への最大限の支援を期待する。またこれからは AI を活用した仕事や課題も増えていくと考えるため、学生同士が共同で AI を活用して課題に取り組むような機会が増えると良いと考えている。

- 「AI 時代におけるよりよい学びの実現」や「AI と共に生きる時代において、大学で学ぶ意義」に関して出た意見。

AI と共に生きる時代において、大学での学びのあり方にも変化が求められていると感じる。端末上でいつでもどこでもより分かりやすい動画などの授業を受けることができるようになり、AI を使うことは、これからの社会で必要なリテラシーだと感じるようになった。企業でも AI ツールの導入が進み、生産性向上を目指す動きがある中、大学でも AI を「楽をする」ためではなく、「生産性の高い学びを行うための手段」として捉えてほしい。

その一方で、全ての課題を AI にやらせる学生が出ないことを期待したい。AI にすべてを丸投げするのではなく、自分の考えをまとめてから使うなど、メリハリを持って使用することが重要である。AI が出した答えに対しては常に批判的に捉える姿勢を持ち、自分の考えの補助・発展に繋げていくことがより良い学びにつながると考える。

大学では、AI が蓄える大量の知識を有効的に使う力を身につけることが大学教育の目的であると考えられる。大抵の人間は AI に知識量や情報量で勝つことは不可能である。だからこそ、知識や情報の保管庫として AI を用い、それをもとに実用的な提案ができる力を身につけることが、大学で学ぶ者にこれから求められる力である。

大学で学ぶ意義はただ知識を身につけることだけではないと考える。第一に、積極的な学習姿勢、批判的思考力、そして自ら問いを設定する力を身につけることである。AI があらゆる情報を瞬時に提供する現代において、自ら学び、情報を批判的に吟味できる学生は、将来社会で高く評価されると考える。第二に、大学では自身の専門科目を通じて独自の価値観を身につけるだけでなく、一般教養科目や課外活動を通して他の専門性を持つ学生と交流することができ、多様な価値観に触れる機会がある。これが将来、リーダーとしての強みとなる。第三に、未解明な問いに直面し、その解決プロセスを理解し、自ら道を切り拓く力を養うことが、大学で学ぶ中でも最も重要な意義だと考える。AI は既存の知識をなぞることはできても、新しい知を探求・発見することはできない。だからこそ、大学では研究能力の基礎を身につけることが重要である。

さらに、大学こそ試験的導入を率先して行うべきだと考える。人間にしかできない業務と AI に任せすることで現場の負担が軽減する業務を見極め、積極的に試してみる姿勢が求められる。また、生成 AI との付き合い方についてもっと教えてほしいという声も多く、AI の正しい使い方を学ぶ機会が大学の中で設けられることが望ましい。

以上のように、AI と共に生きる時代において、大学は知識の習得にとどまらず、批判的思考や他者との交流、新しい問いに挑戦する力を育む場であるべきだと考える。そしてその中で、AI を適切に活用しながら、より良い学びを実現していく姿勢が求められている。

- 懇談会の議論を踏まえて、大学教育のあり方について、部局としてどう考えるか。

懇談会を通じて、AI 時代における大学教育のあり方について多くの示唆を得た。まず、AI の活用は学生・教員を問わず「当然」のことであり、日常的に取り入れられている現実がある一方で、「どう使っているのかを迷いながら利用している」という声も多く聞かれた。AI は自分が「何をしたいか、どうしたいか」の踏み台であり、そこに価値を見出し、正しさを見極めていくには、やはり人間としての「経験」が必要である。教員も学生も、AI の力を活用しながら、同時にそれに依存しすぎず、「AI が言ったことも疑わないとならない」という姿勢を共有していく必要がある。

大学教育として重要なのは、AI では不十分な部分、大学ならではの良さを見極め、活用と批判的思考を両立させながら「深い学びを実現していく」ことにある。特に看護職のような人と直接向き合う専門職では、「AI だから触れ合えない、人間だから触れ合いながら学ぶ」ことの大切さを教育の中で伝えていかねばならない。AI による知識提供や情報整理が可能になった今こそ、大学は「判断には価値が伴う」という視点を持ち、「価値を作り上げる力」を育成する場であるべきである。

学生の声からは、AI の利便性を評価しつつも、「AI にはできないフィードバック」を教員に求める姿勢や、「生産性の高い学びを行うための手段」として AI を位置づける意識が見られた。これに対し、教員としても「教員だからこそ、人間だからこそ返せるフィードバック」や、「時間性、物語性」をもった支援とは何かを改めて考える必要があると感じている。

また、「AI の使い方のレッスンにはニーズがある」という点は学生・教員の双方で共有された認識であり、今後は学部教育の中で AI リテラシーを高める実践的な取り組みが必要である。学生に対しては、「全ての課題を AI にやらせる」ことの危険性を伝え、自らの考えを持ったうえで AI を補助的に活用するという姿勢を育む教育が求められる。

研究面においても、「ロジカルな思考を AI と共に考える」ことで、AI の知識蓄積を壁打ちのように使い、人間の創造性や批判的思考をさらに発展させることができると考える。AI では見つけられない「一つの正しさではない問い」に向き合うこと、そして「どうあるべきか」を考え続けることこそが、大学教育の根幹である。

最後に、懇談会自体が「90 分の授業のよう」であり、学生と教員がお互いに教え合い、学び合う貴重な時間であったことも強調したい。このような対話の場を今後も継続し、大学教育のあるべき姿をともに模索していくことが、部局としての責務であると考えている。

なおこの懇談会を機に、大学院生主催で学生同士が学び合う AI とデジタル技術における自主勉強会が立ち上がったことは、AI への理解を深め模索する第一歩となるであろう。